

日本における近代仏教学

前田惠學

日本における近代仏教学の研究は、明治以後のことにして過去の日本の仏教の伝統に触れる必要がある。日本の仏教は、初伝以来今日までおよそ千四百年、その間、実にさまざま歴史の流れに堪えてきた。それなりにまた独自の成長発展を遂げてきた。今後もまた、絶余曲折はあるにしても新たな展開を遂げていくに相違ない。

日本の仏教の特徴は、多くの宗派に分れていることである。これは中国の隋や唐の時代の仏教に影響せられることが多かったからである。今日の日本には、天台宗、真言宗、浄土宗、真宗、禅宗、日蓮宗などが、既成仏教の代表的な宗派として存在している。いずれも鎌倉時代までに成立したものであり、それ以来日本仏教の伝統の根幹を形成してきた。

伝統的な仏教を支えてきたものは、聖典の側から言えば、漢訳の經典である。インドにおいて成立した仏教の經典が中国に伝えられ、実際に千年以上にわたって漢訳せられた經典の量は数え切れぬほど膨大なもので、人類の文化の上に残した功績は、計り知れぬものがある。漢訳の大藏經は、長期にわたり中国はもちろん、朝鮮半島や日本においてもすぐれた形で出版せられ、日本の佛教徒は、この漢訳の經典を尊重して、これをいかに読むか、心血を注いで究明してきた。

日本における近代仏教学（前田）

さて日本の伝統的な仏教は、宗派はそれぞれ違っていても、みな一様に仏道を目指す点において異なるものではない。今日日本の既成仏教が沈滯しているのでないかと非難せられたり、また励まされたりしている。その主たる原因の一つは、仏教が葬式や法要にあまりに傾きすぎている点にあると思われる。しかし仏教が葬式、法要と結びつくことは、日本の特殊な風土と歴史を背景にしていることであって、必ずしも不都合なことではない。むしろこれは目的さえ誤まらなければ、仏教の民衆化・土着化にとって非常にプラスになることである。他方において雑音に煩わされることなく、真摯に求道している人も少なからずあり、篤信者と言うべき人があちこちにいられることも、疑いのない事実である。仏法の真実とは、知慧と慈悲であり、悲智円満を実現していくところに、仏道の在りようがあるはずである。

ところで近代の日本において、仏教はいくつかの難問と取り組まなくてはならなかつた。

第一には、国内的に、明治の排仏毀釈に見られるような、国粹主義からの圧迫を克服することであった。これはのちの軍国主義に対する仏教の態度にも無関係ではあるまい。

第二は、西洋の近代化にいかに対応するか、ないし西洋の思想や宗教(とくにキリスト教)の攻勢をいかに防ぐかという点にある。そして現在ではむしろマルクス主義に対する対応の問題がより大きな関心となりつつあるであろう。

第三の問題は、最近における新宗教の勃興である。

しかしここでは、こうした問題に深く論及することはできない。これらは多くは言わば外側からの要因に対する対応の問題であつて、伝統的な仏教自体が、みずから求め、その意味で、自己の内から生み出したとも言える近代仏教学そのものについての問題ではないからである。

すでに述べたように、日本の伝統的な仏教は、漢訳經典の仏教であった。しかるに明治以後、近代の日本には、西洋から新たにパリ語や梵語、チベット語などの知識が導入された。植民地支配の結果、インド・ネパールその他の周辺地域で、西洋人が大量の原典を入手し、学問的な研究をはじめたからである。

南条文雄博士は、梵語の原典で『無量寿經』が読みたいと言つて、英國に留学し、日本にはじめて西洋の近代梵語学を輸入した。ついで高橋順次郎博士は、ペーリ語の研究に手をつけ、一九〇〇年頃東京大学ではじめてこれを講じた。それ以来、日本の国立大学のインド哲学科や仏教学科などでは、梵語やペーリ語の原典による仏教の研究に力を注いできた。今日では、北海道大学、東北大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学などに講座が設けられている。また私立では、東洋大学、早稲田大学等でも仏教学の講義が行なわれている。さらに重要なのは各宗各派で設立している仏教系大学である。東京には駒沢大学や大正大学・立正大学等がある。名古屋には愛知学院大学や同志大學、京都には大谷大学、龍谷大学、仏教大学、花園大学、種智院大学、高野山大学等があつて、いざれも学問研究の上で、伝統と業績を誇っている。仏教系の大学には、それぞれの宗派の伝統的な仏教——これは宗乘とが宗学と呼ばれているが、つまり漢訳の仏教である——を基本としつつも、同時に仏教の原典研究に従事する学者も少なくからずあつて、新しい研究分野を開いてきた。その成果は、従来の伝統的な仏教の理解に確実性を与え、新たな知識を加えるものであつた。とくに原始仏教や大乗仏教の分野で、大きな成果があげられた。

近代仏教学は、まず何よりも、学問を確實な根拠にもとづいて立論することを必要条件とする。そのため第一資料を大切にし、翻訳されたものよりは原典を重視する原典主義をとる。なるべくたくさんの資料を輯集して、異本があれば、これを比較し、まず原本を確定すれば、それを翻訳し、またこれに関連して研究をすすめ、原典の評価をする。梵語やペーリ語の原本の作製は、現地で多量の写本類を入手することができた西洋の学者の業績には、学ぶべきものが多かつたが、日本でも翻訳や研究——とくに文献学的研究において、多くのすぐれた成果をあげてきた。多種多量の原典が紹介せられるとともに、すでに知られていたテキスト、特に漢訳仏典との比較研究が盛んとなつた。たとえば原始仏教の分野における、ペーリ語のテキストと、漢訳の律・阿含との比較研究のごときは、その顯著な例である。特に日本の学者は、ペーリ語と漢訳の經典を比較的容易に駆使できるところから、すぐれた業績をあげた。姉崎正治博士の *The Four Buddhist Āgamas in Chinese* (一九〇八年) や赤沼智善教授の『漢巴四部四阿含互照錄』

（一九二九年）は、原始仏教聖典の比較研究の上に、大きな足跡を残したものである。

日本の原始仏教研ないし釈尊の研究は、多くはパーリ・漢訳両經典など、諸異本の比較という方法的基礎の上に立っている。この点、西欧の研究が、どちらかと言えば、パーリ語資料に偏ることが多かったのに対し、日本の研究は、はるかに客觀性の高い研究を進めてきたと言いうる。そして比較研究の結果、漢訳經典が単なる翻訳以上のきわめて高い価値を有することも明らかになった。パーリ語・梵語の原本と漢訳經典とが必ずしも同一系統のものではなく、むしろそれぞれ独立の異伝を形成していることが多いためである。こうした点から、漢訳の經典が、時にはパーリ語や梵語の原典よりも高い価値のある場合がある。

このようにしてわれわれは、今日漢訳經典以外にも、いくつかの伝承をもつことができるようになり、これらを批判的に取り扱かうことが学問にとって大切な態度となってきた。批判主義ということが、近代仏教学の大きな特質である。批判主義の立場を貫くとき、いかなる立場に立って批判するかが重要な問題となる。この場合、重要視されるのは、客觀性と普遍性である。誰が見ても、客觀的に正しいと判断される態度が必要である。これは人文科学としてのあるべき學問的態度である。

こうした態度は、もちろん學問的に大切なことであるが、それではこの学問によって仏教の究極的立場が明らかとなるか、という点になると、問題はおのずから異なってくる。仏像を美術的に觀賞してみても、仏教にならないと同様に、仏教を學問的に研究してみても必ずしも仏教にならないはずである。このことは、他から言われるまでもなく仏教学者はよく自覺しているのである。時に現代の日本は仏教学は盛んであるが、仏教は盛んでないなどと批判せられるが、これも一理あることである。今日の日本には、国立・私立ないし仏教系の諸大学に、多くの仏教学者を擁し、全国的には相当な数にのぼる。日本全国の仏教学者を会員として組織している日本印度学仏教学会は、その会員およそ千七百名、年一回開催せられる学術大会には、三〇〇名を越える研究発表が行なわれる。ほかにも大小各種の学会や研究機関がある。このように他に世界に例のない多くの學問的研究がなされているが、仏教そのものは必ずし

も盛んであるとは言われていないのである。

しかしこのことは、仏教を学問的に研究する仏教学の価値が低いということではない。新しい未知の文化の受容には、準備が必要であるし、また順序がある。時間がかかるのである。たとえば、仏教がはじめて中国に受容されから、真に中国のものになりきるまでには、非常に長い年月を要している。中国への仏教初伝を西暦一世紀ごろ、また真に中国的な仏教が生まれた時代を隋・唐のころと考へるならば、およそ四一五〇〇年の年月を要したこととなる。原典を輸入してから、翻訳し研究し、知的に理解して教相判釈を行ない、さらに自己の修行を重ね、そして中国独自の仏教の立場を確立するまでには、それだけの年月が必要だったのである。

明治以後、日本の仏教学界が、パーリ語や梵語、チベット語の資料を受け容れてから、まだ百年を経過してはいない。過去の中国とは、全く事情が異なるとしても、近代仏教学の成果を云々することは、まだ時期尚早であるかと思われる。やがては仏教の全体的な理解に対し、大きな展望を開いてくれるであろうとの期待がある。今は仏教が大きな飛躍をするための基礎作りをしていると言えよう。

特に日本の場合、伝統的に漢訳の仏教を所有していたことは、新たに将来せられた原典の理解に、絶大なる利益となつてゐる。西洋では、パーリ語、梵語の原典はもちろん、漢訳についても、全くその伝統がなかつたので、そこにはただ学問的な一主として文献学的な研究が見られるのみである。日本には漢訳仏教の伝統があつたおかげで、やがてパーリ語・梵語等の原典の仏教を総合する一大総合仏教が樹立せられる可能性を秘めているとも言えよう。ここに日本の近代仏教学と仏教の未来があるかと思われる。

本稿は、昭和四十七年十月、ソウル東国大学校で行なつた講演に手を加えたものである。——ただ筆者は、文献学中心の仏教学だけでは、仏教の研究として不充分であると考えており、その点は、機会があればいざれ稿を改めて論じたい。